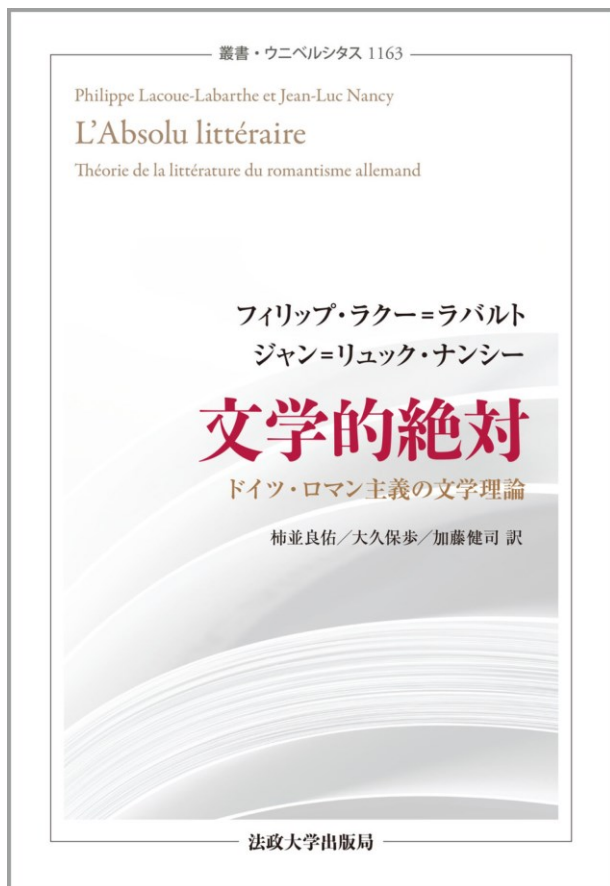


# 「文学」と「哲学」の境界線を問い直す

キーワード[現代思想, 哲学, 文学, ロマン主義, 批評]

准教授 柿並 良佑



フィリップ・ラクー＝ラバルト、ジャン＝リュック・ナンシー  
『文学的絶対——ドイツロマン主義の文学理論』  
法政大学出版局、2023年  
柿並良佑・大久保歩・加藤健司 訳

2023年10月に、長らく時間のかかった翻訳書を刊行することができました。原書はラクー＝ラバルトとナンシーという二人のフランスの哲学者が初期ドイツ・ロマン主義の理論的テキストをフランス語に訳し、その重要性を解説するとともに、批判的吟味を施した著作で、1978年に出版されました。1800年頃という200年以上も前の文学的作品について書かれた45年も前の書物にどのような意味があるのでしょうか？

今日でも、ドラマや雰囲気指して「ロマンチック」という言葉が口にされることがあります。「ロマン派」の芸術・音楽もいまだ根強い人気を保っています。それだけでなく、アーティスト＝人間が考えるのではなく、何かひらめきによって、自分の意図とは別に素晴らしい作品が出来上がってしまう…、そうした逸話にも事欠きません。そうした感性や考え方は今なお私たちを捉えてはなさないのですが、それらが、いつ、どのようにして誕生したのかを考えるのにこの大著は現代の古典と言ってよい重要性を失っていません。

アピールポイント：

「文学と哲学の関係」のみならず、私たちが「文学」そして「哲学」と呼んでいるものが何かを考え直すのに、ひいてはそれらによって培われてきた「私たち」自身を問い直すことを、私は改めて研究の主題にしています。

分野： 哲学、表象文化論  
専門： 現代フランス哲学、共同体論、身体論

E-mail : kakinami [at] human.kj.Yamagata-u.ac.jp  
Tel : 023-628-4746

